

1. 構想の概要

【構想の名称】

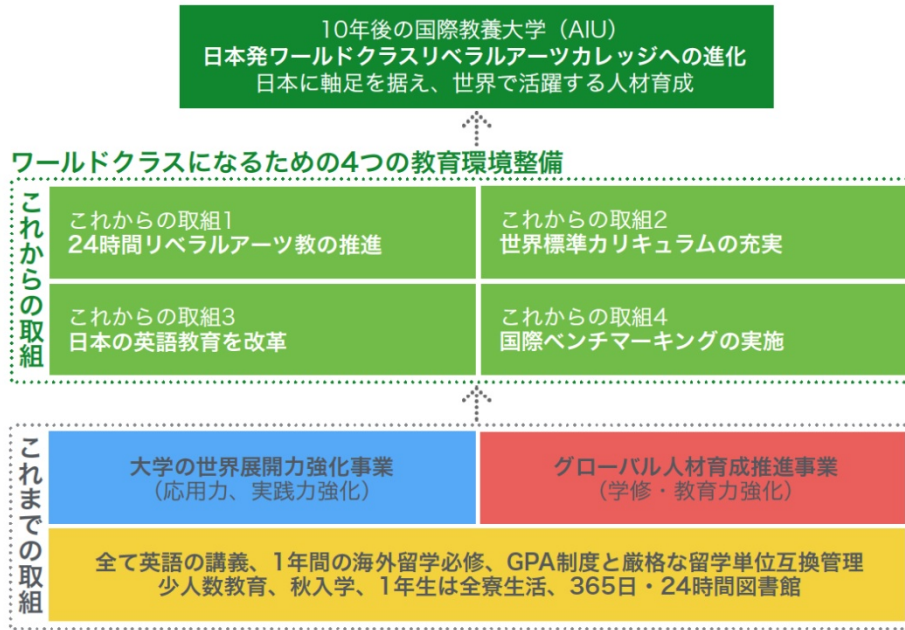
日本発ワールドクラスリベラルアーツカレッジ構想

【SGUの取組を通じて目指す大学の将来像】

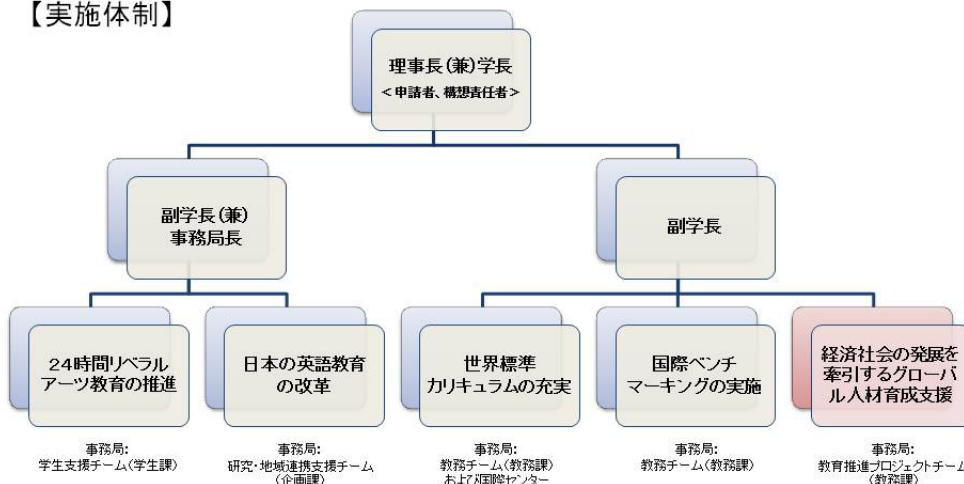
本学を今後10年で「ワールドクラスリベラルアーツカレッジ」へ進化させ、世界標準の教養教育を確立し日本から世界に向けて新たに発信する。学生の能動的学修の徹底した内在化と留学生との協働作業の推進、本学カリキュラムの世界標準化、本学の英語教育能力の社会への還元、海外トップリベラルアーツ大学の教育との比較と客観的な検証の実施などにより、「日本に軸足を据え、世界で活躍する人材」を育成していく。

【構想の概要】

本学は開学時より、全科目を英語で開講し、学部生に1年間の留学と1年次の入寮の義務を課すなど、数々の先導的な取組を行ってきた。これらの取組に加え、本構想ではワールドクラスを目指すための教育環境整備を進める4つの新たなプロジェクトに取り組む。『①24時間リベラルアーツ教育の推進』では、テーマ別ハウス群の導入により、生活の場としての「学生寮」からリベラルアーツ教育を24時間実践するための「教育寮」への転換を図り、学生の能動的学修をサポートする。『②世界標準カリキュラムの充実』では、日本研究科目群の拡充と、反転授業・パートナーズプログラム・国際協働PBL等の導入による、講義レベルの国際標準化を進める。『③日本の英語教育の改革』では、イングリッシュビレッジ、ティーチャーズセミナーの実施により、本学で培った英語教育分野における実践的方法論を県内外に還元する。『④国際ベンチマーキングの実施』では、米国大学との相互分析・評価等の実施により、本学の国際教養教育の国際標準化を検証する。



【実施体制】



◆各プロジェクトには、コーディネーターとなる教員がおり、プログラムの進行を管理・監督する。各プロジェクトの事務は、担当事務局が行う。

◆事務局内に、SGU・学修改革推進室を設置し、「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」を含む5つのプロジェクトの進捗状況・予算執行状況等の取りまとめを行う。

【10年間の計画概要】

○ 24時間リベラルアーツ教育の推進

平成26年度には、テーマ別ハウス群に居住する学生募集を開始し、平成27年度からテーマ別ハウス群を運営していく。学生は学期ごとに入れ替え、またテーマ別ハウスに関する調査・評価を定期的実施することで改善を加えていく。平成32年度までに学生主導による自主的なテーマ別ハウスの運営を促進させ、他大学のテーマ別ハウスとの交流も行っていく。最終年度となる平成35年度には、これまでのテーマ別ハウスの成果をデータ化し、報告書を作成する。

○ 世界標準カリキュラムの実施

平成26年度には、日本研究科目担当教員やITオフィス職員の国際公募を行い、平成27年度からの日本学修センター設立、ICT学修スタジオ設立の準備を行う。また、MOOCsを活用した反転授業を開始するほか、パートナーズプログラムの構想案について提携校と協議を進める。平成28年度には国際協働PBL授業を開始する。平成29年度には中間報告書を作成し、翌30年度からはカリキュラムや科目の世界標準調整作業を開始する。最終年度となる平成35年度には教務システムの調整結果を検証する。

○ 日本の英語教育の改革

平成26年度から、県内外の小中高校生を対象としたイングリッシュビレッジを順次開催していく。イングリッシュビレッジの指導者となる本学学部生・大学院生・留学生のトレーニングを同時に行い、実践に活用する。ティーチャーズセミナーは県内外の小中高校教員を対象としており、平成27年度から順次開催していく。

○ 国際ベンチマーキングの実施

平成26年度に国際ベンチマーキングを行う米国大学との共同ワーキンググループを立ち上げ、調査方法や調査計画を作成する。平成27年度以降、ワーキンググループによる事前調査や訪問調査を実施し、平成28年度には調査結果の分析を行い、翌29年度に中間報告書を作成しFDやWSなどで公表する。平成30年度には新たな国際ベンチマーキングの相手校とのワーキンググループを立ち上げ、平成32年度に中間報告書を作成し、翌33年度に調査結果の分析を行う。平成34年度には過去2回のベンチマーキングをまとめた報告書をFDやWSで公表し、最終年度となる平成35年度はシンポジウムを開催する。

【特徴的な取組(国際化、ガバナンス改革、教育改革等)】

「24時間リベラルアーツ教育の推進」

これまで「生活寮」としてのみ機能してきた学生寮を「教育寮」へ転換し、24時間リベラルアーツ教育を実践するための生活時空間を創出する。テーマ別に設けられたハウスでは、留学生と日本人学生が生活を共にしつつ「チーム」として「テーマ」に取り組み、「学ぶ喜び・醍醐味を堪能することによる能動的学修態度の内在化」、「協働作業力」、「リーダーシップ」、「自己規律」、「礼節」といったグローバル人材に必要な素養を身につけるなど、人間性も涵養する。

「世界標準カリキュラムの実施」

全正規生に1年間の海外留学を義務付け、代替に海外提携大学から留学生を受け入れている本学が、交換留学の円滑な継続のため、4つの新たな取組を導入して本学のカリキュラムを世界標準化し、互換可能なものとしていく。

- ① 日本研究科目群の拡大・強化
主に留学生を対象とした日本研究(日本の歴史、社会、経済・ビジネス、など)科目に加え、秋田の地域特性を活かした講義(縄文文化論、中山間地域・限界集落論、狩猟文化比較論、など)も開講する。
- ② MOOCsと反転授業の導入
海外トップスクールが提供するMOOCsを本学講義の反転授業の一環として取り入れる。
- ③ 国際協働PBLの推進
平成23年度に採択された「大学の世界展開力強化事業」で本学が取り組んできた日米協働課題解決型プロジェクト科目を、ASEAN諸国提携校との間で実施する。
- ④ パートナーズプログラムの推進
本学教員と海外提携大学の教員とが共同開発する2～6週間程度の研修プログラムに、提携大学の日本研究専攻学生たちをグループとして受け入れる。

「日本の英語教育の改革」

本学で培った英語教育分野における実践的方法論を秋田県内外の小中高校等の生徒および教師に還元し、初等中等英語教育を改善することでグローバル人材育成を促進する。小中高校生には本学の学生が中心となって、英語で英語を学ぶ「イングリッシュビレッジ」を開催し、小中高校教員には本学の教員が「ティーチャーズセミナー」を開催しリカレント教育の機会を提供する。

「国際ベンチマーキングの実施」

本学の国際教養教育の実態が世界標準のものになっているか検証するため、CLAの本格導入に加え、米国のリベラルアーツ大学との共同ベンチマーキングを実施する。

2. 取組内容の進捗状況(平成26年度)

■ 共通の成果指標と達成目標

国際化関連

○ 留学提携校数を50ヶ国・地域、200校まで拡大

平成27年5月15日時点で、46ヶ国174大学と協定を締結している。

○ 本学独自の海外に留学する学生向けの奨学金制度の拡充

成績優秀者(留学申請時にGPA3.8以上)を対象に、留学前一時金を給付する「留学時奨学金」制度を継続している。また、平成27年度から開始される「AIU旭化成奨学金」は、交換留学期間(1年間)の支援を目的に、成績優秀者に対して留学時に奨学金を給付するもので、奨学金の給付および奨学生の選抜は株式会社旭化成が行う。

○ 卒業までにTOEIC換算で900を達成する学生の割合を75%

平成26年度の卒業生165名のうち、TOEIC換算900を達成した学生は64名で、割合は38.8%であった。

○ 教務システムと教育の質保証システムの連動性を強化

平成27年度以降の「国際ベンチマーキングの実施」により、科目コードの体系や意味づけ、シラバス、実際の授業内容、課題の質と量、難易度、到達目標、科目コードと授業のレベルの検証方法などを比較するほか、米国のトップレベルアーツカレッジと、成績分布や成績評価のポリシー、GPA制度の活用方法などについて比較し、得られた知見を生かして「世界標準カリキュラム」の充実を図っていく。

○ 学生寮等における留学生と日本人学生との協働学修の機会を強化

「24時間リベラルアーツ教育」プロジェクトで運営するテーマ別ハウスでは、日本芸術文化など留学生も対象としたテーマがあり、ハウスでは留学生と日本人学生とが共に生活し、また学生主導による活動内容の決定・実行など、協働学修・能動学修の環境を整備している。



〈テーマ別ハウスミーティング(H27.4.7)〉

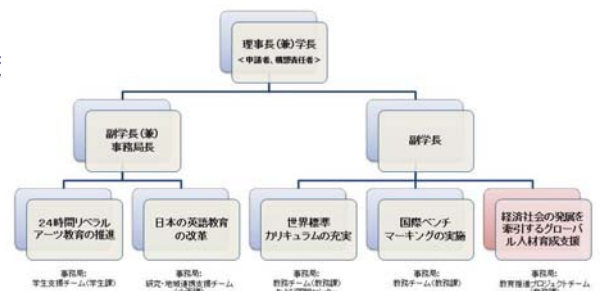
ガバナンス改革関連

○ 国際ベンチマーキングで明らかになった改善点を活かした人事評価制度の改革

「国際ベンチマーキングの実施」のため立ち上げたワーキンググループによる海外リベラルアーツ大学との協議をさらに進め、国際通用性を見据えた人事評価制度の導入・活用を検討していく。

○ トップダウンによる意思決定のみならず、ボトムアップによる政策提言の仕組みを強化

SGU事業の推進については、学長のリーダーシップの下、各プログラムごとにコーディネーターとなる教員を置き、またプログラムごとの担当事務局が事業の執行をサポートしている。



〈SGU実施体制〉

教育改革関連

○ 本学独自の取組(24時間リベラルアーツ教育)と合わせて、能動的な学修文化を発展させ、学生参加による大学改革を推進

「24時間リベラルアーツ教育の推進」プロジェクトでは、テーマ別ハウス群の運営に関して、学生の意見を積極的に取り入れており、学生が能動的に活動できる環境を整備している。

○ 国際バカロレアを含む外部試験を積極的に活用

16種類ある入試のうち11種類において、外部試験(TOEFL iBT、TOEFL PBT、TOEIC、英検、国連英検、ケンブリッジ英検、IELTS)の資格またはスコアを活用しており、うち5種類では国際バカロレア(IB)を出願要件の一つとして認めている。平成26年度入試からは、AO・高校留学生入試ⅠおよびAO・高校留学生入試Ⅱの試験名称に「IB」を加え、「AO・IB・高校留学生入試Ⅰ」および「AO・IB・高校留学生入試Ⅱ」と変更し、国際バカロレアを高校生や高校関係者にも積極的に広報している。

○ 学生のニーズのさらなる多様化を踏まえ、他大学とも協力して、柔軟なアカデミック・パスを強化

「国際ベンチマーキングの実施」によりワーキンググループによる海外リベラルアーツ大学との協議をさらに進め、アカデミック・パスについて比較調査研究していく。

■ 大学独自の成果指標と達成目標

○ 高度な国際性と流動性を備えた教育制度

1. 教員の国際的に通用する教育力の強化
 - ・ 常勤教員海外講義等実施率(目標:75%):12.3%(平成26年度実績)
2. 海外体験の多様化
 - ・ 1年間の必修の留学以外の海外留学・インターンシップ体験率(目標:50%):7.9%(平成26年度卒業生実績)
3. 留学生の学びの質
 - ・ 講義の質についての留学生の満足度(目標:満足・やや満足75%):60.5%



〈日米協働課題解決型プロジェクトによる海外体験(H26.6)@カリフォルニア大学バークレー校〉

○ 高度に自律的で能動的な学修と社会参加

1. 学術的課外活動の促進
 - ・ テーマ別ハウス参加率(目標:75%):3.6%(平成27年度春学期入居、正規学生)
2. 自律的研究調査能力の向上
 - ・ 卒業セミナー論文の質(目標:トップリベラルアーツカレッジに相応しいレベル):平成27年度以降、国際ベンチマーキング作業の中で定性的に評価していく。
3. 社会貢献を通じた学びの促進
 - ・ イングリッシュビレッジ参加率(目標:正規学生10%、留学生25%):2.8%(平成26年度実績、正規学生)、5.6%(同、留学生)

○ 持続可能な発展を支えるガバナンスと勤務環境

1. 質の高い意思決定プロセス
 - ・ 教育の改善・充実について、学生代表を含めた多様なステークホルダーが適切な形で関与することを可能とする効率的なガバナンスの確立度合いを、平成27年度以降の「国際ベンチマーキングの実施」により定性的に評価していく。
2. 教員の研究・教育のバランス
 - ・ サバティカル等取得率(目標100%):5.5%(平成20年～26年までの7年間の実績)
3. 職員の職務遂行力の強化
 - ・ 職員海外研修経験率(目標50%):14.6%(平成26年度実績)

■ 大学の特性を踏まえた特徴ある取組

○ 学修と生活の一体性強化による「24時間リベラルアーツ教育」の推進

テーマ別ハウス群の平成27年度運用開始に向けた準備に取り掛かり、3つのテーマハウス(大学院進学、公共政策、日本芸術文化)の学生募集を行った。面談等審査を経て、大学院進学ハウス:13名、公共政策ハウス:8名、日本芸術文化ハウス:20名(うち留学生11名)が選抜され、それぞれ入居前の説明会を開催することで、学生の意見を反映させながら活動内容を確認した。

○ 「世界標準カリキュラム」の充実、提携校とカリキュラム上の同等性・相互補完性を強化

- ・ MOOCsなどのICTを活用した遠隔授業・反転授業実施準備のため海外大学の視察を行ったほか、学内でワーキンググループを立ち上げ、MOOCs導入に向けた検討に着手した。
- ・ 日本語プログラムの教員が海外提携大学を視察訪問し、パートナーズプログラム構築について提携校のニーズ調査を行った。

○ 「イングリッシュビレッジ」と「ティーチャーズセミナー」の取組を通じて、日本の初等中等教育における英語教育を先導

- ・ 平成27年1月～3月にかけてイングリッシュビレッジを6回実施し、県内外の小中高生233名が参加した。イングリッシュビレッジの開催に合わせて、本学の大学院生、学部生、留学生のトレーニングを実施し、毎回18名程度が指導者として参加した。
- ・ ティーチャーズセミナーについては、県内外の小中高校教員と開催時期の調整を図り、平成27年夏から秋にかけての開催に向けた準備に取り掛かった。



〈イングリッシュビレッジ(H27.1.5)@国際教養大学〉

○ 「国際ベンチマーキング」による本学カリキュラムの国際的質保証の担保

学内にワーキンググループを立ち上げ、共同でベンチマーキングを行う海外大学を訪問しての協議や、海外の研究会に参加して情報収集をするなど、平成27年度以降のベンチマーキングの実施に向けた準備を行った。

■ 自由記述欄

○ 採択記念対談会「日本発ワールドクラスリベラルアーツカレッジ構想」

平成27年1月30日にSGU採択記念イベントを開催し、本学の取り組みについて広く大学および企業関係者に周知したほか、パンフレットの作成・配布による広報活動も行った。

また、保護者会など既存のイベントを活用しての広報活動に加え、学内の学生・教職員を対象とした説明会やFD研究会などでも取り組みについて紹介するなど、学内外への事業の浸透に努めた。



〈採択記念対談会(H27.1.30)@パレスホテル東京〉

3. 取組内容の進捗状況(平成27年度)

■ 共通の成果指標と達成目標

国際化関連

○ 留学提携校数を50か国・地域、200校まで拡大

平成28年4月25日時点で、46か国177大学と協定を締結している。

○ 本学独自の海外に留学する学生向けの奨学金制度の拡充

成績優秀者(留学申請時にGPA3.8以上)を対象に、留学前一時金を給付する「留学時奨学金」制度を継続している。また、平成27年度から「AIU旭化成奨学金」制度が導入され、株式会社旭化成が選抜した学部正規生(1名)に対し、交換留学期間(1年間)の支援のための奨学金を留学時に給付した。

○ 卒業までにTOEIC換算で900を達成する学生の割合を75%

学内においてTOEIC@IPを実施し、無料で学生が受験できるようにしている。平成27年度の卒業生186名のうち、TOEIC換算900を達成した学生は87名で、割合は46.8%であった(平成27年度の平均点は890点)。

○ 教務システムと教育の質保証システムの連動性を強化

留学生の授業評価を検証するため、授業評価シートに学生種別をチェックする欄を設け、留学生のスコアを分けて集計できるように変更した。国際ベンチマーキングでは、CLA+を導入している米国大学の訪問調査を行った。

○ 学生寮等における留学生と日本人学生との協働学修の機会を強化

平成27年度から運営を開始した日本芸術文化ハウスでは、春学期20名(うち留学生11名)、秋学期16名(うち留学生12名)の学生が協働生活を送り、ミーティングや勉強会の開催、イベント参加などの協働学修機会を、学生自身が主体的に企画・実行した。



〈日本芸術文化ハウスのミーティング(H27.9.2)〉

ガバナンス改革関連

○ 国際ベンチマーキングで明らかになった改善点を活かした人事評価制度の改革

国際ベンチマーキングのため、米国大学(ディキンソン大学、ウィリアム・アンド・メアリー大学、ジョージタウン大学)を訪問し調査を行った。今後は海外の事例と本学の特性を踏まえた人事評価制度を目指して改善していく。

○ トップダウンによる意思決定のみならず、ボトムアップによる政策提言の仕組みを強化

学長のリーダーシップの下、各プロジェクトのコーディネーター教員を核として、他の教員を巻き込みながらプロジェクトを進行しており、ワーキンググループには若手教員も多く参加している。



〈ウィリアム・アンド・メアリー大学(米国)でのベンチマーキング実地調査(H28.1.18-20)〉

教育改革関連

○ 本学独自の取組(24時間リベラルアーツ教育)と合わせて、能動的な学修文化を発展させ、学生参加による大学改革を推進

- 「24時間リベラルアーツ教育の推進」プロジェクトでは、テーマ別ハウス群の運営に関して、学生の意見を積極的に取り入れており、学生が能動的に活動できる環境を整備している。
- 「イングリッシュビレッジ」や「ティーチャーズセミナー」などの英語教育プログラムに学生(学部生・院生・留学生)を自主的に参加させ、自らがクラスを運営するという能動的な活動を経験する場を与えている。



〈イングリッシュビレッジ(H27.7.18)〉

○ 国際バカロレアを含む外部試験を積極的に活用

16種類ある入試のうち11種類において、外部試験(TOEFL iBT、TOEFL PBT、TOEIC、英検、国連英検、ケンブリッジ英検、IELTS)の資格またはスコアを活用しており、うち5種類では国際バカロレア(IB)を出願要件の一つとして認めている。平成26年度入試からは、AO・高校留学生入試ⅠおよびAO・高校留学生入試Ⅱの試験名称に「IB」を加え、「AO・IB・高校留学生入試Ⅰ」および「AO・IB・高校留学生入試Ⅱ」と変更し、国際バカロレアの活用を高校生や高校関係者にも積極的に広報している。

○ 学生のニーズのさらなる多様化を踏まえ、他大学とも協力して、柔軟なアカデミック・パスを強化

カリキュラムワーキンググループを立ち上げ、国際ベンチマーキング調査で得られた情報を共有し、カリキュラムの世界標準化について協議した。今後、学生とのヒアリングも行っていく予定である。

■ 大学独自の成果指標と達成目標

○ 高度な国際性と流動性を備えた教育制度

1. 教員の国際的に通用する教育力の強化
 - ・ 常勤教員海外講義等実施率(目標:75%):10.8%(平成27年度実績)
2. 海外体験の多様化
 - ・ 1年間の必修の留学以外の海外留学・インターンシップ体験率(目標:50%):9.6%(平成27年度卒業生実績)
3. 留学生の学びの質
 - ・ 講義の質についての留学生の満足度(目標:満足・やや満足75%):45.6%



〈Japan Society of Northern California(米国)でのインターンシップ(H27.6.10-12.10)〉

○ 高度に自律的で能動的な学修と社会参加

1. 学術的課外活動の促進
 - ・ テーマ別ハウス参加率(目標:75%):5.5%(平成27年度実績)
2. 自律的研究調査能力の向上
 - ・ 卒業セミナー論文の質(目標:トップリベラルアーツカレッジに相応しいレベル):国際ベンチマーキングのため米国3大学を訪問し、卒業論文や卒業プロジェクトについて聞き取り調査を行った。
3. 社会貢献を通じた学びの促進
 - ・ イングリッシュビレッジ参加率(目標:正規学生10%、留学生25%):5.7%(平成27年度実績、正規学生)、10.6%(同、留学生)

○ 持続可能な発展を支えるガバナンスと勤務環境

1. 質の高い意思決定プロセス
 - ・ 教育の改善・充実について、学生代表を含めた多様なステークホルダーが適切な形で関与することを可能とする効率的なガバナンスの確立度合いを、平成27年度以降の「国際ベンチマーキングの実施」により定性的に評価していく。
2. 教員の研究・教育のバランス
 - ・ サバティカル等取得率(目標100%):10.8%(平成21年~27年までの7年間の実績)
3. 職員の職務遂行力の強化
 - ・ 職員海外研修経験率(目標50%):13.6%(平成27年度実績)



〈コロラド大学ボルダー校(米国)でのMOOCs技術支援研修(H28.2.16-23)〉

■ 大学の特性を踏まえた特徴ある取組

○ 学修と生活の一体性強化による「24時間リベラルアーツ教育」の推進

平成27年度春学期から3つのテーマ別ハウス(日本芸術文化ハウス、大学院進学ハウス、公共政策ハウス)の運営を開始した。ミーティングやイベント参加、勉強会などを学生主導で企画し、各学期末には学習成果を発表した。また、平成28年度のテーマ別ハウス運営に向けた準備にも取りかかった。

○ 「世界標準カリキュラム」の充実、提携校とカリキュラム上の同等性・相互補完性を強化

日本研究科目担当教員を国際公募により新規採用することで日本研究科目群の強化を促進し、海外提携大学(オーストラリア国立大学)とのパートナーズプログラム実施と平成28年度の継続実施に向けた広報活動を展開した。MOOCsを利用した反転授業の試験運用として、MITのオンライン教材を取り入れるなどの取組を開始した。また、国際協働PBLの平成28年度開講に向けた準備を進めたほか、TOEFL iBTを試験的に実施するなど学習環境のグローバル化を進めた。

○ 「イングリッシュビレッジ」と「ティーチャーズセミナー」の取組を通じて、日本の初等中等教育における英語教育を先導

- ・ 平成27年7月から平成28年3月にかけてイングリッシュビレッジを11回実施し、県内外の小中高校生384名が参加した。イングリッシュビレッジの開催に合わせて、本学の大学院生、学部生、留学生のトレーニングを実施し、毎回18名程度が指導者として参加した。
- ・ 平成27年7月から平成28年2月にかけてティーチャーズセミナーを7回実施し、県内外の小中高校教員190名が参加した。

○ 「国際ベンチマーキング」による本学カリキュラムの国際的質保証の担保

米国大学(ディキンソン大学、ウィリアム・アンド・メアリー大学、ジョージタウン大学)を訪問して、本学が策定した調査項目に基づき実地調査を行ったほか、CLAを導入している米国大学(ワシントン・ジェファーソン大学、マーシャル大学、カーセジ大学、ペロイト大学、モンマス大学)を訪問し、学習成果の評価指標の活用について調査した。

■ 自由記述欄

○ パートナーズプログラムの実施

平成28年1月4日から2月12日にかけて、オーストラリア国立大学(ANU)とのパートナーズプログラム「JPL472 Japanese Language and Cultural Immersion Program: Advanced(上級日本語 秋田学冬期集中プログラム)」を開講した。参加したANU生7名は、秋田学の講義、日本語表現練習、バストリップ、ホームステイを含む地域の冬まつりへの参加など多様な活動を通して、日本語の習得と表現能力の向上ならびに日本文化への理解を深めた。



〈白岩城址燈火祭の準備(H28.2.6)〉